

の端にのぼったりする。

夜に先祖の霊が歩くというのは聞いたことがあった。日中の光が明確な世界を作りだすのに比して、暗がりには論理の輪郭をぼやけさせ、他者との境界を曖昧にする。夜が死者と近づく時間であるのは頷ける気がする。しかし、ここでは夜と同じように、市場が死者を惹きつける。一体なぜなのだろう。

交換という行為が根源的にもつ魔術的な力、或いは偶発性を含んだコントロールしきれない力の存在が、市場をして生と死の境界の曖昧な場所にするのだろうか。それとも、賑わう人によって作られた非日常の空気が、死者の世界への結節点を作るのだろうか。どちらにしても、売買や交換、あるいは市場という場所に対して人びとがもっている恐れに近い感情と同時に、強烈な執着と愛着がそこ

には感じられる。市場という多くのものを惹きつける磁場は、このアンビバレントな感情によって支えられてきたのかもしれない、と思う。

「100 フラン?」「高い」「75 フランにしろ」「ふざけるな」「十分安くしてるだろ」

喧噪の中、人びとは湯立つような真剣さで値段の交渉を重ね、少し疲れたような顔をして去っていく。けれど4日後には、現実的な必要性と、埋められた何かの骨の力によって、生者も死者も惹きつけられるように市場へと戻ってくるのだ。

引用文献

- 日本政策金融公庫. 2014. 『小企業の経営指標 2014 卸売り・小売業／飲食店・宿泊業』, 1.
東京都産業労働局. 2014. 『東京都中小企業業種別経営動向調査報告書平成 26 年度調査』, 52.

カシュミール溪谷に残るいにしえの歌

井上春緒*

2015 年 8 月 29 日の夕刻、私はスーフィアーナ・ムスィーキー (*Sūfīyāna Mūsīqī*) を夜通しで聴くメヘフィル (*mehfil*) という集いに参加するため、音楽家ムシュタク・サーズナワーズの運転する車でシュリーナ

ガルから南へ約 30 km 行った山の集落チャラール・エ・シャリーフへと向かっていた。街から離れた小高い山の頂にある集落に近くにつれ、人も車もまばらになり真夏なのにひんやりとした空気が車窓の隙間から入りこ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 ノールッディーン・ヌーラーニー聖者廟

んできた。私の心はほとんど世間に知られていない音楽について調査ができることへの期待と、未知の場所で一晩過ごすことへの不安の間で揺れていた。日が落ちかけた集落の風景はそんな不安定な気分をなだめるかのようにのどかなものだった。遠くの方に屋根がとがったひときわ目をひく建造物が現れた。ヌールッディーン・ヌーラーニー聖者廟である。その夜の宴はまずそこへ参詣するところから始まった。

カシュミールのローカルな伝統音楽

15世紀のスーフィー詩人ヌールッディーン・ヌーラーニー（1377～1440）はそれまでのスーフィー詩人がペルシャ語で詩を書いたのに対し、一般民衆でも理解できるカシュミール語で詩を書いた最初期のリシ¹⁾ (*rishi*) であった。今回同行したサーズナワーズ家は

この聖者を祀るメヘフィルでスーフィアーナ・ムースイーキーの演奏を務めてきた音楽家である。

スーフィアーナ・ムースイーキーとは北インドでも特にカシュミールのシュリーナガルでのみ聴くことができるローカルな伝統音楽である。この音楽がどのように生まれ、カシュミール固有の音楽文化として継承されてきたのかについてはあまりわかっていない。しかし、カシュミールが地理的にインドとペルシャの間に位置していたことから、14世紀頃からインドに入ってきたペルシャ文化の影響をうけていることは間違いないだろう。

スーフィアーナ・ムースイーキーはもともとメヘフィルで演奏される機会が多かったが、近年では結婚式やラジオやテレビの番組の中でカシュミールを代表する古典音楽として一般の人々に向けて演奏される機会も増えてきたようだ。

インド音楽、それともペルシャ音楽

スーフィアーナ・ムースイーキーは5人編成で演奏される声楽アンサンブルである。マカーム (*maqām*) という旋律理論とターラ (*tālā*) というリズム理論に基づいたこれらの曲は、1曲完全に演奏するのに約1時間を要する。²⁾ 使用される楽器はサントウル

1) 「リシ」とは15世紀頃に現れたカシュミール人の詩人聖者たちに対する呼称である。その中でもラール・デードとヌールッディーン・ヌーラーニーは絶大な人気を誇る。彼らがヒンドゥーであったのかムスリムであったのかは議論が分かれる。

2) マカームはメロディーを奏するのに使用する音階や音の動き方を規定する理論である。また、それぞれのマカームで演奏される曲そのものを指す場合もある。基本となる12のマカームとその派生型を合わせると理論上は180あるとされる。ただしムシュタク氏曰く実際演奏されるものは40～50である。ターラはさまざまな拍子のリズム型をもつリズム理論である。北インドの古典音楽ヒンドゥスターニー音楽で使用されるものとは異なる。

(*santūr*), サーズ (*sāz*), セタール (*setār*), タブラー (*tablā*) である。

サントゥールはイランで生まれた撥で弦を叩く打弦楽器である。100本ぐらいの弦が張られており調律するのが難しい。この楽器はスーフィアーナ・ムースイーキーで使われていたのが北インドの古典音楽であるヒンドゥスターニー音楽に取り入れられ主要な弦楽器のひとつになった。³⁾ サーズは3本の弦を弓で弾く擦弦楽器であるが、微分音のコントロールなどが難しいため演奏者が少ない。⁴⁾ サーズナワーズ家の先代の家元はこの楽器の名手であったためにサーズナワーズ(サーズ奏者)と呼ばれるようになったという。セタールは3本の弦が張られ、ピックのようなものをもって弾く撥弦楽器である。イランにも同名の楽器が存在することからも、この音楽がペルシャと深いつながりのあることがわかる。タブラーは北インドを代表する打楽器である。ただしヒンドゥスターニー音楽で通常使われているものよりも大きく、1オクターブ低く調律されている。その奏法は独特でありインドのタブラーとも異なっている。⁵⁾ このように演奏される楽器ひとつとっても、こ

の音楽がインドとペルシャの両方に深く関係していることがわかっていただけるだろう。

受け継がれる音楽の伝統

スーフィアーナ・ムースイーキーはガラナーと呼ばれる血縁関係で結びついた職業的な音楽家によって継承されてきた。多くの巨匠がこの世を去った現在、3つの主要なガラナーを残すのみになっている。⁶⁾ 今回の調査では特にサーズナワーズ・ガラナーを調査の対象とした。その理由は他でもなく、かれらの音楽に惹かれたからだ。サーズナワーズ・ガラナーは2014年の2月に亡くなった先代グラーム・ムハンマド・サーズナ



写真2 サントゥール

- 3) サントゥールはカシュミール出身の音楽家シヴ・クマール・シャルマによって50年代にヒンドゥスターニー音楽に取り入れられた。当初はインド音楽特有の歌うように音程を上下させる「ミーンド」という奏法ができないという理由で聴衆に受け入れられなかった。しかし楽器や奏法の改良によってそれらの障害を克服し今では北インドを代表する弦楽器となっている。
- 4) 微分音とは半音よりもさらに細かい音程のことであり、インド音楽やペルシャ音楽ではメロディーを奏でるうえで、これらの音程を非常に重視している。スーフィアーナ・ムースイーキーではフレットをもたないサーズが唯一微分音を奏でることができる楽器である。
- 5) 特徴としてボールと呼ばれる太鼓の唱歌がヒンドゥスターニー音楽のものとは異なっていること、使われるリズム型がペルシャやアラブ起源の名称のものであることなどが挙げられる。
- 6) 3つのガラナーとはサーズナワーズ・ガラナーの他にティベットバッカール・ガラナーとカリーンバーフ・ガラナーを指す。



写真3 サーズ



写真5 タブラー



写真4 セタール

ワーズによって支えられてきた最古のガラナーである。現在の家元のムシュタクはかれらの祖先が約400年前にイランからこの音楽をもちこんだと誇らしげに語っていた。事の真相はわからないがムシュタクと2人の

弟、サビールとラフィーク、そしてムシュタクの息子カイザーが奏でる音楽は、他のガラナーの演奏よりも忠実に伝統を継承しているように聴こえた。⁷⁾

私はせっかくなので、かれらに頼んでマカームの幾つかを録音、録画させてもらった。ほとんど聴ける機会のないスーフィアーナ・ムースィーキーを録音、録画できたことに満足していた私に、ムシュタクは言った。

「もし本物のスーフィアーナ・ムースィーキーを聴きたいのならば、メヘフィルに参加するべきだ。」

夜が更けてもメヘフィルはつづく

その夜のメヘフィルは約30人の男たちが一同に会し、聖者廟の近くの家屋の一室で、飲食をともにしながら朝までスーフィアー

7) なにをもって「正統な伝統」とするかには異論があるだろう。ここではあくまで筆者の主観的意見を述べたにすぎない。ただそれを裏付ける根拠を上げるのならば、他のガラナーのようにヒンドゥスターニー音楽への傾倒がみられない点や伝統的教授法を維持している点などが挙げられる。

ナ・ムースイーキーに耳を傾ける内輪の集いであつた。男たちが水パイプを燻らせながら部屋の壁にもたれ、いにしへのスーフィー詩人の歌に耳をすませるこのようなメヘフィルはひと昔前には頻繁に開かれていたようである。映画やテレビなど人々の娯楽が増えた現在、メヘフィルの数は激減した。サーズナワーズ・ガラナーはそのような潮流の中でも伝統的なメヘフィルを維持していこうと努めているようだ。

9時頃から始まったメヘフィルでは5曲のマカームが演奏された。1曲演奏するごとに30分程度の休憩がとられ、その間食事や軽食が振舞われた。人々がゆったりと優雅に雑談しているのが印象的であつた。寝静まったこの山の集落で、メヘフィルは夜が更けても淡々とつづいていった。18世紀に書かれたスーフィアーナ・ムースイーキーに関する音楽書『歓喜の歌』(*Tirana-e Sorer*)ではそれぞれのマカームは演奏されるべき時刻、12の星宮、「風」「土」「水」「火」の4大元素と関係付けて説明されている。さらに興味深いことには、それぞれマカームは特定の病気の治療に効果があるとも書かれている。このような解釈はヒンドウスターニー音楽のラーガにも若干みられる。しかし時間や季節感が感じられなくなった現代ではそれらの規則は形骸化している。どうやらカシュミールではいまだにこれらの規則が守られているようだ。人々は音楽を単なる娯楽や芸術鑑賞の対象としてではなく、自分たちを取り囲むコスモロジーの中に位置付けているのだろうか。



写真6 メヘフィルの様子

カシュミール渓谷に残るいにしへの歌

音楽は文学や美術のように作品として残るものではない。もちろん録音技術が生まれてからはすこし事情が違ふかもしれないが、それとて100年以上前の音をわれわれに聴かせてくれるものではない。われわれができるのは、今ある歌を聴いてその中にいにしへの人の息吹を感じ取ることでしかない。もちろん私はスーフィアーナ・ムースイーキーが中世からまったく変わらず今まで伝承されてきたなどというつもりはない。むしろわれわれの予想や期待に反して、かなり新しい要素が入っているだろうし、これからも音楽文化として生き残るためにさまざまな変革をせまられることだろう。ただ音楽としての外面がいくら変わろうとも、カシュミールの人々を結びつける紐帯として暮らしや世界観に根ざした音楽であることはやめないで欲しい。そのような土地に根ざした音楽こそ人々に感動をもたらすことができるのだから。